

News Letter

■2013年10月17日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は11件が採択されました。本号では、シリーズ第10回として、生物資源学部高山 進先生による「社会調査演習」の報告をします。

2012年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告 (10)

「社会調査演習」

授業のねらい

三重県志摩市は現在「里海創生事業」に取り組んでいる。「里海」とは「人手が加わることで生物生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域」と定義されるが、志摩市の場合対象領域を「海域に限らず、海の生態系に大きな関連を持つ後背の森や川・町なども含む広い空間(沿岸域)」としている。

志摩市はこの「沿岸域」の保全と利用を、管轄部署を越えて、民間と行政の協力のもとに、一体的にマネージする、という挑戦を始めている。このタイプの取り組みを「沿岸域総合管理」と言い、日本では先駆的取り組みであり、志摩市は試行錯誤を積み重ねている。

この取り組みでは、地域資源の「保全」が最優先されるが、上手に「利用」することも奨励されている。その際、個々の商品をバラバラにブランド化するのではなく、「里海創生という志を持った町の商品」としてのブランド(「地域(里海)ブランド」)にすることをめざしている。

本授業は、2011年と2012年の2年間、こうした志摩市の挑戦を学び、学生として少しでも後押しできるような関わり方を模索した。

1) 班ごとに注目した資源の価値を正確に把握し、志摩の人たちがこれまでどのようににかかわり、今どのように資源価値を高めようとしているか理解する。

2) 志摩の人たちがそれぞれの資源・商品のアピールから、さらにどのように「地域(里海)ブランド」に高めようと模索しているかを学ぶ。また、それぞれの資源・商品の「価値」の向上、課題の克服と「里海創生」をどうつなげようとしているか、その視点と具体的取り組みを学ぶ。現在抱えている問題点も合わせて把握する。

3) その際、「よそ者、若者の感性をフル稼働する提案は歓迎してもらえという立場を活かして、想像力を膨らませた提案を試みてほしい」と強調した。

事前準備

授業は生物資源学部資源循環学科循環社会システム学講座3年生を対象とした講座必修科目であり、前期1コマ+夏休み集中の2コマで行われているが、前期のうち5回分を現地実習の準備にあてた。準備として、①関連資料に目を通すこと。②ゲスト講師として里海推進室の浦中係長をお呼びし、「里海創生政策」についての質問をぶつける。③班のテーマを5つ用意し、選択してもらい、グループワークで事前学習を行う。④各班のねらいを9月初めまでに固め、それをもとにヒアリング対象者を決定した。夏休み集中の取組を表1に示す。

学生のモチベーションを喚起する

2年間ともに、前期の授業に志摩市の担当職員の方に来ていただき、地域資源の現状、里海政策のねらい、現場の苦労等について、学生から事前に質問を出させ質疑を行った。また「よそ者、若者」として真剣で自由な提案は大歓迎であることを述べてもらった。2011年には現地実習3日目に、10名を越える志摩市職員の前で学生たちがプレゼンを行い、ある班が「志摩市は良いものがたくさんあるのに全体がバラバラに見える点が残念だ」と述べ、その提案のコンセプトがその年度末に出た『里海創生計画』の表紙の真珠の首飾りのデザインに活かされた。ちょうど志摩市側も計画作りの段階で、さまざまなアイデアを求めている時期と重なり、こうした絶好の機会を持つことができた。

(裏面に続く)

このように学生が現実社会に対して役に立つ場面を作り、その場面に学生を信頼して送り出し真剣勝負をさせるシチュエーションづくりは、とりわけ「実地体験型」のPBLにとって大事な要素と思われる。

「当事者意識」が喚起されれば、学生はおのずと真剣にならざるを得ない。その条件づくりと学生の納得こそが最大のファシリテーションになったものと思う。

(高山 進)

表1 志摩市における現地実習の日程

現地調査の進行 (2012 年)

第一日目 (9 月 24 日)

説明：志摩市里海政策のポイントを再確認 (里海推進室浦中さん)

講演①：原条誠也さん (立神真珠養殖業者)：真珠ができるまでのプロセス、海に対する接し方の変化、海が豊かになることと真珠の品質とのかかわり

講演②：国分秀樹さん (三重県水産研究所)：干潟を再生することの意義を学ぶ

夕方アクアヴィラホテルの干潟を見学し、国分さんから現場に即した解説をいただく。学生は事前に『英虞湾』を読み、干潟再生の意義を確認しておく。

第二日目 (9 月 25 日)

第1班：「志摩の人々にとって干潟 (海、真珠) とはいかなる存在であったか」。聞き書き手法。

海と深くかかわってこられた立神地区の方から「生業 (くらし) の変遷と海の変化、干潟を含む海の豊かな体験、今後の方向 (堤防が開くということ)」に関してお話を伺う。

第2班：「イセエビ、アワビのブランド力向上 (資源管理努力も合わせてアピール)」

午前：外湾漁協：イセエビの資源管理方法、アワビの資源管理方法、漁協にとっての里海政策。午後：海女の方のお話 (片田地区、和具地区海女小屋)：海の様子の変化、資源管理の具体的方法。

第3班：「十分活かされていなかった地域資源に光を当てる (きんこ、アカモク等商品開発)」。

午前：商工会：近年の商品開発、キンコ、アカモク、サバ、アオサのポイント。午後：丸勢水産：業者さんによる商品開発の視点と現状。「地域ブランドを目指す」という考え方についてどう受け止めるか。志摩の塩辛の売り出し方にも注目。

第4班：「志摩のほんものの魅力、海と山と農地のかつてのつながりを掘り起こす (聞き書き手法)」。

越賀地区のお年寄りから「これまでの暮らしぶり (海の生業と畑仕事)、地域の特徴、越賀の良さは」について伺う。

第5班：「里山保全と利用の統合は可能か (国立公園内の取り組みであることを考慮)」

午前：いせしま森林組合：雑木林を間伐することが海に与える効果、「いさり火の森」の間伐方法、午後：伊勢志摩国立公園自然保護管：森林管理と国立公園制度、環境省は里海政策にどうかかわるのか。ODAWA 創林さん：炭としての利用と薪としての利用。

第三日目 (9 月 26 日)

2 日目の夜からパワーポイントで実習のまとめと提案を作成し、3 日目の午後に里海推進室職員を前にミニ発表を行い、コメントをいただいた。